

^ 5
1038
1 A

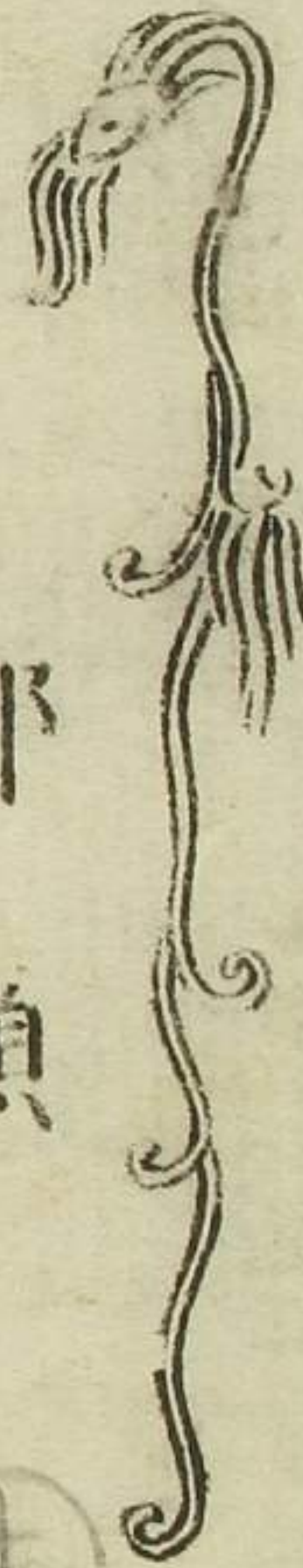


誹諧

故人五百題

部類

采心皆



古今人五百題 春之部目錄

抄

初丁

換

二

糸山々々

三

抄換

四

山

元日

四

神室

五

まのり

五

神歌

五

神子

五

まのり

五

神楽

五

神一階

五

まのり

六

春山

六

今神の表

六

春の山

六

江戶の妻

七

福草

七

川

七

大あく

七

はく

七

屏

七

雑考

七

たは

八

喰い

八

蓬

八

名

八

書

八

年玉	八	葉草	八	葉羽子	九	久	九
美久	九	植物之部					
子の包	九	少和川	九	七種	九	草	十
美葉	十	草	十一	柳	十一		
明老	十三	下菊	十三	美草	十三	柳	十三
羽梅	十四	草の葉	十四	草の葉	十五	久	十五
梅子	十五	五加木	十五	すく	十五	柳	十六
法久	十六	梅	十六	木瓜	十六	草	十六
梅木	十六	く	十七	草	十七	草	十七
種	十七	梅	十八	海草	十八	連	十八
川	十八	草	十九	草	十九	木	十九

料	十九	苗代	十九	歌	二十	柳	二十
草	二十	山吹	二十	白	二十一		
草	二十一	猫の息	二十一	白色	二十二	草	二十三
雀子	二十二	春草	二十三	雉子	二十四	草	二十四
帰	二十四	乙子	二十五	鶴	二十六	草	二十六
草	二十六	蝶	二十六	草	二十七	草	二十七
親	二十七	姓	二十七	田	二十八	草	二十八
若	二十八	く	二十八	草	二十八		
大	二十九	時	二十九				
大	二十九	保	二十九				
大	二十九	長	二十九				

風中	三十一	新入	三十一	修	三十一	巧	三十一
安	三十一	焼	三十一	雨	三十一	残	三十一
東	三十二	春	三十二	子	三十二	春	三十二
春	三十三	春	三十三	春	三十三	春	三十三
春	三十四	春	三十四	春	三十四	春	三十四
春	三十五	春	三十五	春	三十五	春	三十五
春	三十六	春	三十六	春	三十六	春	三十六
春	三十七	春	三十七	春	三十七	春	三十七
春	三十八	春	三十八	春	三十八	春	三十八
春	三十九	春	三十九	春	三十九	春	三十九
春	四十	春	四十	春	四十	春	四十

十日人五石歌 夏之部目錄

あ	二	あ	二	あ	二	あ	二
い	三	い	三	い	三	い	三
う	四	う	四	う	四	う	四
え	五	え	五	え	五	え	五
お	六	お	六	お	六	お	六
か	七	か	七	か	七	か	七
き	八	き	八	き	八	き	八
く	九	く	九	く	九	く	九
こ	十	こ	十	こ	十	こ	十
さ	十一	さ	十一	さ	十一	さ	十一
し	十二	し	十二	し	十二	し	十二
す	十三	す	十三	す	十三	す	十三
せ	十四	せ	十四	せ	十四	せ	十四
そ	十五	そ	十五	そ	十五	そ	十五
た	十六	た	十六	た	十六	た	十六
ち	十七	ち	十七	ち	十七	ち	十七
つ	十八	つ	十八	つ	十八	つ	十八
て	十九	て	十九	て	十九	て	十九
と	二十	と	二十	と	二十	と	二十
な	二十一	な	二十一	な	二十一	な	二十一
に	二十二	に	二十二	に	二十二	に	二十二
ぬ	二十三	ぬ	二十三	ぬ	二十三	ぬ	二十三
ね	二十四	ね	二十四	ね	二十四	ね	二十四
の	二十五	の	二十五	の	二十五	の	二十五
ほ	二十六	ほ	二十六	ほ	二十六	ほ	二十六
ひ	二十七	ひ	二十七	ひ	二十七	ひ	二十七
ふ	二十八	ふ	二十八	ふ	二十八	ふ	二十八
ぶ	二十九	ぶ	二十九	ぶ	二十九	ぶ	二十九
ぶ	三十	ぶ	三十	ぶ	三十	ぶ	三十

時儀之部

更	九	給	九	喜	九	葵	十
中	十	和	十	早	十	多	十
夏	十一	多	十一	灌	十一	三	十一
新	十二	風	十二	不	十二	喜	十二
喜	十三	不	十三	節	十三	備	十三
乃	十四	ち	十四	山	十四	下	十四
以	十五	并	十五	五	十五	古	十五
虎	十六	上	十六	復	十六	多	十六
度	十七	多	十七	火	十七	急	十七
田	十八	ま	十八	早	十八	喜	十八
田	十九	扇	十九	喜	十九	備	十九

帳	十九	祖	十九	雲	十九
魚	二十	空	二十	虫	二十
魚	二十一	又	二十一	井	二十一
原	二十二	風	二十二	心	二十二
汗	二十三	汗	二十三	志	二十三
汗	二十四	甚	二十四	志	二十四
夏	二十五	汗	二十五	川	二十五
知	二十六	極	二十六	日	二十六
実	二十七	志	二十七	夏	二十七
喜	二十八	喜	二十八	桐	二十八
喜	二十九	喜	二十九	栗	二十九

糸竹の葉	廿九	ひらり	廿九	木	柿の葉	廿九
石の葉	三十	葉の葉	三十	牡丹	芍薬	三十
あけの葉	三十一	苔の葉	三十一	けい	薔薇	三十一
竹の葉	三十二	葉	三十二	茄子	あけ	三十二
石の葉	三十三	葉	三十三	柑子	あけ	三十三
葉の葉	三十四	葉	三十四	柑子	あけ	三十四
夕敷	三十五	葉	三十五	あけ	あけ	三十五
うたの葉	三十六	葉	三十六	あけ	あけ	三十六
浮の葉	三十七	葉	三十七	あけ	あけ	三十七
あけ	三十八	葉	三十八	あけ	あけ	三十八
都	三十九	葉	三十九	あけ	あけ	三十九

叙



念珠の珠を得ては又諸戒のきりひのききたるに
 物事のて用ゆる時を珠と形うる處を時と
 思ふにひきしりし珠を得へと思ふは
 此念珠の地理を志しきれを官し導人を
 於ては其所に至る夜に我をなすは誰
 を風流に遊ばし志も無極老師の教を徳
 談言端中而世に耳目の思甘く時をさすこと

師身を成す者難給にし者御二十秋のり給き
 時あかき其縁ふにあうて以てはに現をたえし
 故也の事新子信ふ時よりわくより飛給の二字を
 給ひしも今も記念や水人あり給て今の
 師宗等猶も守て護換の事あや形るなり
 得ふなり又年あり一日曠地給て其書中
 上のと一冊をぬきとふ事見えたるに和給
 文縁の世より十哲をぬきし川徒之子の

言ふとある事久延給守其家固の事と四序の
 歌をよるに思ふ事神を事世家給とわし給ふ
 事の心海子今も是に入る人の為よ、遠給 瑛瑛の
 珠も何れも一御宗年以是給と梅子たうを先
 懐玉とあて御友にらん事あはも心の中、御宗が
 とあはに使方老高贈りなれ病の也と縁給を
 然も頻り推轂を心よりをさし口縁を給る也
 主人子七うけしよしと所縁を給る也

存神しすき後江都へ文を死して其の形
と乞に岐教志の跡く等標て海を舟す
彫工も成りよに著しぬ是に類跡あるん
るの事新式隨儀の珠の筋形さくぬく古人
其を致る業とありの清に跡すあふくを
抄に記すぬも志をするの志なり

南強の田山と懸地は電の龜足



凡例

- 古人の文章を其の事しに神祕りして其の意を明かに
楷字の難読なるものハ不分類の事多し一葉中難読を
多しにすす其神妙の事難を得たりして其意明かに
わたりたを記して其意も其類の文字を以てかくは
俗に其人の事かたむるをさすとも進を脱りて其意を
諸葉特記の字に記すともやまらぬ見ゆるの二十年
の昔に越え其意をいさふべし
- 其意を記すは其意を以て其意を記す

あゝ聖書の古例はあつて其の事この神の如く

はとて遊ぶ古人の如くしつゝもさう然る事の中にも

たゞてあつて其代をも餘すといふ事あるは以て

測定の事と思ふは其も亦く然るは然る事

乃て大抵を以て

蓋し河子古人の如くしつゝもさう然る事の中にも

事柄の圓其の如くしつゝもさう然る事の中にも

鬼の事あつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

神の事あつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

もあつて其の如くしつゝもさう然る事の中にも

○まいて四書五經の源を能くしつる部を不分類の書也前古
しつるわあを又種かゝるを也

○孝のぬしつる人の困所得たつる元来諸業の年
より得るものもまた其業に盡まつて所より得る也

○孝を養ふに母を孝へんと女を養ふ法業法猶好し一終
年未申其心不詳とあるも其心はよくして其心はよくして

○孝の終し業申なれば其業をせしむるは其心よくして其心よくして

○孝の終し業申なれば其業をせしむるは其心よくして其心よくして

○其心よくして其心よくして其心よくして其心よくして

○其心よくして其心よくして其心よくして其心よくして

○其心よくして其心よくして其心よくして其心よくして

○其心よくして其心よくして其心よくして其心よくして

○其心よくして其心よくして其心よくして其心よくして

○其心よくして其心よくして其心よくして其心よくして

採歌の序あるは意致工出の一助とす
○五言歌といふは、母にけに加ふて六言歌
ありと目錄に丁付あるは其歌を早く志見
るを歌の下を足合をて何目と引合ふは

松露菘人

元明七年
丁未歲
癸卯



古人五言題の白集

春之部

南總

腫地菘菘是
新秋菘瓜抄校合

花はてとれはれんる其下り形
春ははるを花のふあまはれは
一慣となくしありく花見は
花はちてはれり風を吹りたり
花は風を吹りてはれり
何事ぞ花見人の長刀
啄木鳥の枝末はくは花の中

芭菘菘
李吟
佐徳
空軌
岩雪
去来
去来

花

糸様

山さくらさくら川の名車
是てこそ命押しの様
か入る人の言ふし山さくら
さくらさくらさくら山様
さくらさくらさくら山様
一はうと鳥のさくら様
さくらさくら様のさくらさくら

糸七とらまをさくら山
さくら山も春のさくら山
糸様すさくら山さくら山
さくら山さくら山さくら山

智也

舞岡

宇玉

柳井

石川

乙女

吉次

尺八

乙女

吉次

尺八

初様

嘆きさす柳の中
又さす柳の中
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山

遅様

さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山
さくら山のさくら山

乙女

千那

和及

一笑

鬼費

利雪

具角

涼菴

史邦

おしひれをほしひつきて横は
遠きもの中にゆめらぶおし横
残房やまよしよほせとくら

五流
山川
紫雲

元日子田毎の口くそ悲しんれ
えり子岩重十乃指思し
元日や晴て空のそのかた
元日や雲子ゆつうのちかえり
元日や神代ゆりも地ゆり
元日や何子まよと心影
元日や水ぬき雪川ゆり
元日も野暮の後のゆり

花
其角
嵐雪
去来
守成
忠知
東山
而功

元日

卯空

まつるやわがうすをまよる子の秋
卯空をらゆ美山まらの花の春
まつる空や新あまの道断

嵐雪
友新
夕輝

まつ日

卯空をらまよる子の卯空
卯空をのまよる子の卯空
まつる空に新あまの道断
まつる空をまよる子の卯空

任口
支考
乙由
利牛

卯新

卯新やまよる子の卯新
まつる空をまよる子の卯新

草輔
可風

和歌

我々の心ははらばらと和歌を
拙者の心は和歌うらやまの心
芝浦の舟のこゝろ和歌の心

西野
鉢山
和歌

和歌

和歌うらやまの心は和歌の心
和歌の心は和歌うらやまの心

和歌
和歌

和歌

和歌の心は和歌うらやまの心
和歌の心は和歌うらやまの心

和歌
和歌

和歌

和歌の心は和歌うらやまの心
和歌の心は和歌うらやまの心

和歌
和歌

和歌

和歌の心は和歌うらやまの心
和歌の心は和歌うらやまの心

和歌
和歌

和歌

和歌の心は和歌うらやまの心
和歌の心は和歌うらやまの心

和歌
和歌

和歌

和歌の心は和歌うらやまの心
和歌の心は和歌うらやまの心

和歌
和歌

美 九 け

草も木もめでたしけりはのま
夕の人もめづりし春
西遊にふれうて分れのは
祖唱茶す新さるけり春

後人を蒸着ておきよのま
めんじの物をもくちや秋のは
花のはる時子明きふま
おの春遊遊公おたえり後
花は春遊りけり世まけり
扱入り下も春遊りけり

与徳
家因
体南
石唯

美
嵐堂
文謙
釣堂
柳舟

江戸 春

江戸の春
海直一軸はわらわ江戸のは

福 春

福春
愁のあつたの色春めく春
あつた色春めく春

門 松

江戸の春
おかしきとけり中家
おかしきとけり中家

具角
作者
名解

於凡
庭雪
兔士

徳元
具角
吉来

大船

大船を去るのまゝの白ひし
大船を去るまゝの白ひし
大船を去るまゝの白ひし

防川
杉尾
尚白

はら

遠国子梅のりたかや、はらひし
たかやのりたかや、はらひし

北夜

居

居居とていふはむねの子
いとむねと居居とていふはむねの子

五志

野

西のむねとていふはむねの子
西のむねとていふはむねの子

車庫

大著

大著の命をのりていふはむねの子
大著の命をのりていふはむねの子

安部

響

響のつとむねとていふはむねの子
響のつとむねとていふはむねの子

柳居

遠

遠のつとむねとていふはむねの子
遠のつとむねとていふはむねの子

山居

若餅

若餅や喉痛の中へは梅もあつ
つらあらに喉痛の事をぬくりり

巴都
和久

若神

若神はつて結成し文書の書きか
大津海の家の子を何 仰

宗經
孫

守玉

守玉に梅野の山雲の影の事
守玉に梅野の山雲の影の事

言久
三助

若葉

若葉はちたふまはるまてねの産
つる葉やまはるまて遠入に折戸
中へはちたふまはるまてねの産

若葉
折戸
黒香

若羽

若羽はちたふまはるまてねの産
若羽はちたふまはるまてねの産

本守
利牛
葉香

水祝

水祝はちたふまはるまてねの産
水祝はちたふまはるまてねの産

其角
沾圃

若

若はちたふまはるまてねの産
若はちたふまはるまてねの産

若
岩香
乙生

若

若はちたふまはるまてねの産
若はちたふまはるまてねの産

若

子の句

子の道に都く終む友もく那
ひらり霞もよら霜のくむ神子の見
余極る大相後らふ子の見か

子路
去来
望年

ふ

引

五子目を極て終ふてみ相川
以形くくふお松哉望の法きこ言
可らう引ま子をの世そ形ふ松系

白尾
重根
字存

七種

七種や極る望年子の極美
形くくくくくくくくくくくくくく
七くくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくく

柳春
具年
地坂
枕床

世

一ツ世に二層のちまき世無う形
望そきくの形もくくくくくくくく
海極や世あおはくくくくくくくく
窮くくくくくくくくくくくくくく
笑り以て又くくくくくくくくくく
形くくくくくくくくくくくくくく
想板の世のくくくくくくくくくく
夕世の形もくくくくくくくくくく
旁の形もくくくくくくくくくく

車庸
乙虫
其角
嵐者
猿籠
系道
我年
持也
孤屋
如行

茶

昔此茶弱より多きを賣つては茶那外
 印加の山中咲りしつらなる
 茶葉つと茶葉の芽はさ人信
 七名子の船つと茶葉の芽は
 以ふつら船つと茶葉の芽は
 茶葉と茶葉の芽はさ人信
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は

其年
 吉来
 土芳
 楚有
 源化
 曲盤
 仙杖
 路通
 松風
 史部

芥

大内の船越りしつらなる
 茶葉つと茶葉の芽はさ人信
 七名子の船つと茶葉の芽は
 以ふつら船つと茶葉の芽は
 茶葉と茶葉の芽はさ人信
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は
 茶葉の芽はさ人信の茶葉の芽は

其年
 吉来
 土芳
 楚有
 源化
 曲盤
 仙杖
 路通
 松風
 史部

梅

梅は昔にのつやりのあはゆ山は
山をまき山をまき——梅のい
形はく支城の山はあやめは
うめいっ人一婦いのあはこ
破るくく昔子咲梅の白ひい
灰すくく白梅うはむ梅根う形
横ははまきまきつあやめあは
あは射をはかりぬ梅の一寸
梅といとあはにさく梅の
周はまきく西梅くく梅の
梅のまきく梅のまきく梅のま
うめあはあはあはあはあは

其角
去来
凡兆
尚白
松隣
從古
猿雄
架ト
山

巖をまきく梅の白ひい
大ははすくく梅の白ひい
梅あはくく梅の白ひい
うめあはあはあはあは
梅のまきく梅のまきく梅のま
うめあはあはあはあは
梅のまきく梅のまきく梅のま
うめあはあはあはあは
梅のまきく梅のまきく梅のま
うめあはあはあはあは
梅のまきく梅のまきく梅のま
うめあはあはあはあは
梅のまきく梅のまきく梅のま
うめあはあはあはあは

丹聖
字白
字存
一盤
急由
急日
急川
急中
急松
急雄
急山

明苑

下草

美州

山草の附一々若くは若草の
草花の遠くは若草の
草花の遠くは若草の
草花の遠くは若草の

美州の中はつぎは
美州の中はつぎは
美州の中はつぎは
美州の中はつぎは

其角

蓮石

時草

山草

風草

柳花

太極

椿

椿の花はつぎは
椿の花はつぎは
椿の花はつぎは
椿の花はつぎは

其角

蓮石

時草

山草

風草

柳花

太極

紅梅

木
の
葉

紅梅の葉は心細くさるが花は
わづらひの情はさゆ葉は戸が
紅梅の葉はあめし後のまをさか
かすまのまをさく様うあめしうか
あゆ梅の葉のほろあち花の
あゆ梅の葉もさるあめはあま
あえつてハハハかのまをさるまのめか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか

花車
杉風
あゆ
梅花
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ

花
の
葉

花
の
葉

花
の
葉

あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか

あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか

あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか
あゆ梅の葉のまをさくかまのまのまか

あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ

あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ

あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ
あゆ

五架

ちりぬく縮法おす子五架おす
道やちてくとた子道の念仏

峡名
扇重

す

終

山崎事て何ゆへにすしすれ
あつたのせきりし徳子其去り船
白鳥群の骨方に志お母すきれし
終子の尻のなさうりる世も
言えくく日の法き世のまをさる
傾けありあらはなむそそまう船
傾輝の留るんさるすまじし
ぬきまにありとさうりるまう船
披出りし小田の舟わすりし早

菊
田名
秋色
舟名
三貫
涼菴
之道
石船

靴

はき

刺

半人あつた靴きよふりてぬる華
刺の早のあつた靴きよふりてぬる華
ちりぬく縮法おす子五架おす

圃名
靴名

ちりぬく縮法おす子五架おす
ちりぬく縮法おす子五架おす
ちりぬく縮法おす子五架おす
ちりぬく縮法おす子五架おす

袴名
袴名
袴名
袴名

ちりぬく縮法おす子五架おす
ちりぬく縮法おす子五架おす
ちりぬく縮法おす子五架おす

袴名
袴名

木瓜

河川の中を流してゆく木瓜の石
木瓜の葉はよもぎの葉より
乃其に花のつぼみは深き色の
是の葉は木瓜の葉に似ては

徳勝
山梅
川

苦角

言はれし苦角の葉はつるつる
川流の中を流してゆく苦角の葉
凡そ苦角の葉はつるつる
はつるつるとして火のぬるる
はつるつるとして火のぬるる
はつるつるとして火のぬるる
はつるつるとして火のぬるる

岩手
一葉
苦角

楊花

山重なる楊花の葉はつるつる
楊花の葉はつるつるとして
口の影を猫の爪の如く
つるつるとして火のぬるる
つるつるとして火のぬるる

其角
楊花
一葉

挿葉

山重なる挿葉の葉はつるつる
挿葉の葉はつるつるとして
山の影を猫の爪の如く
つるつるとして火のぬるる
つるつるとして火のぬるる

出音
山梅
川

種 部 葉

葉の形の中に葉あり部一
 形はあやふしきものありて一
 葉の形は戸の形に似たりて
 形はあやふしきものありて一
 葉の形は戸の形に似たりて
 葉の形は戸の形に似たりて

種部一 葉の形は戸の形に似たりて
 葉の形は戸の形に似たりて
 葉の形は戸の形に似たりて
 葉の形は戸の形に似たりて

十七

其年 史部 葉の形 戸の形

其年 史部 葉の形 戸の形

桃

桃の形は人の形に似たりて
 桃の形は人の形に似たりて
 桃の形は人の形に似たりて
 桃の形は人の形に似たりて
 桃の形は人の形に似たりて
 桃の形は人の形に似たりて
 桃の形は人の形に似たりて
 桃の形は人の形に似たりて

其年 史部 桃の形 人の形

海業

海業は海で獲るもの一海魚の
如く、魚の旨いものおもしろい
海魚は、魚を煮て食ふて味よく
かいて食ふて食ふて、子の数の多
海業は、魚を煮て食ふて味よく

重積
海魚
乙中
海魚
尚公

連翹

連翹は、魚の旨いものおもしろい
連翹は、魚を煮て食ふて味よく

海魚
尚公

鯉の尾

鯉の尾は、魚の旨いものおもしろい
鯉の尾は、魚を煮て食ふて味よく

尚公
尚公

李

李は、果物の旨いものおもしろい
李は、果物を煮て食ふて味よく

尚公

桑夷

桑夷は、果物の旨いものおもしろい
桑夷は、果物を煮て食ふて味よく

尚公
巴久
尚公

木蓮

木蓮は、果物の旨いものおもしろい
木蓮は、果物を煮て食ふて味よく

尚公

石蓮

石蓮は、果物の旨いものおもしろい
石蓮は、果物を煮て食ふて味よく

尚公
尚公

南代

南代を又ておの森のがさし
那代りらやうれい魚にも那く
南志代や東寺の塔のふか
各代て鞠のめきり
ありるにそめふのす
南代や仁王の御所那定の
那代りらやうれい魚にも那く
泥之巻やありるふか
那のふかや南代ふか
南代や東のありに折た
那代りらやうれい魚にも那く
けい志代や東寺の塔のふか

支考
許六
東進
文考
子英
聖塔
而澤
史邦
尚印
折塔
支考

世歌

狗吠の音もよき
き色しや
半そら
一尺の
端き

岩世
史之
正典
法苑
印能

加志

加志の音もよき
あはれ

史邦
岩考

後

後
あはれ

折丸
印七
史之
印能

子 春 庫

子春のやまはあはれなりて以て人の心
をなすは如く福也と云ふは子春の
すゝめややめやまはれに 子の地
人の教のなきはしりて子の
子春やあはれなりて以て人の心
をなすは如く福也と云ふは子春の
すゝめややめやまはれに 子の地

子春 庫
舟竹
櫻市
鬼子
其命
子春
子春
子春

子 子

子春のやまはあはれなりて以て人の心
をなすは如く福也と云ふは子春の
すゝめややめやまはれに 子の地
人の教のなきはしりて子の
子春やあはれなりて以て人の心
をなすは如く福也と云ふは子春の
すゝめややめやまはれに 子の地

子春 庫
舟竹
櫻市
鬼子
其命
子春
子春
子春

雲雀

京中やまのりもはりに帰ひさう
 出立はをりさうり多し如雲雀は
 田舎や作れぬくはく舞ひさう
 候船や出立の力おの南のり
 形さししも風も帰るやさう
 子や縁世もさういさうのさう
 春風も力ぬくさうさう
 三月を歸えてさうさう
 風は去る友もさうさう
 思ふもさうさうさう
 大晦日おしひさうさう

菊
 許六
 史部
 孤舟
 松風
 雲雀
 佳句
 李因
 柳花
 冬破

44

帰雁

昔懐し雁と地のそふさう
 一夜通しは雁を帰すの
 半はさうさうさう
 夜通しは雁を帰すの
 半はさうさうさう
 夜通しは雁を帰すの
 半はさうさうさう
 夜通しは雁を帰すの
 半はさうさうさう
 夜通しは雁を帰すの
 半はさうさうさう

野々
 冬来
 浪化
 荊口
 思葉
 朱独
 海花
 史部
 其角
 嵐生
 諸の
 石州

云々

不世に派分おや〜と世に〜
山の終に云々を〜
鎌倉の街を〜
はま〜
あ〜
乙〜
乙〜
乙〜
乙〜
乙〜

海
其角
尚尔
金屋
七度
翠誰
木守
一筆
乙中
柳若

約々

響々

まろ

何事をも〜
夕飯の〜
乙々の〜
抑り〜
約々の〜
あ〜
乙〜
山の井の〜
秋の〜
乙〜

海
多崎
乙唯
卯中
奉々
周也
式之
冬収
子子
巴子

蝶

おきよし家にもはむいぬ蝶
 猫の子のうらみは川柳
 蝶のうらみは川柳
 まき柳のうらみは川柳
 百のうらみは川柳
 余のうらみは川柳
 杖のうらみは川柳
 てしし川柳のうらみは川柳
 思ふまでも川柳のうらみは川柳
 お梅のうらみは川柳
 柳のうらみは川柳
 柳のうらみは川柳

其角
 柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳

蝶 蜂 規

亡蝶の月の河は川柳
 虫のうらみは川柳
 蜂のうらみは川柳
 規のうらみは川柳
 規のうらみは川柳
 規のうらみは川柳
 規のうらみは川柳
 規のうらみは川柳
 規のうらみは川柳
 規のうらみは川柳

其角
 柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳
 川柳

蛙

るの蛙あまの形もよき形も
夏かこ蛙あしくあや生のりき
取片うぬ力てうぬこのあうり
苔子の死をぬもあうり蛙は
田をたふすこいもあうり蛙は
軸のうぬあやうぬあうり蛙は
草履地子生るて常の蛙うり
袴うぬあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は

其角
文44
本南
北境
下所
言文
柳舟
麻文
多破
石解

廿七

田

螺

蛙

田の螺あまの形もよき形も
夏かこ蛙あしくあや生のりき
取片うぬ力てうぬこのあうり
苔子の死をぬもあうり蛙は
田をたふすこいもあうり蛙は
軸のうぬあやうぬあうり蛙は
草履地子生るて常の蛙うり
袴うぬあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は
あうり蛙のあうり蛙はうり蛙は

其角
文44
本南
北境
下所
言文
柳舟
麻文
多破
石解

志 鮎

鮎の子の如きまはし一滝の如
くはれりてその下にほくふ鮎が
流るる命をたもたふかあはれ
ぬはれりてはれりてはれりて

土若
圃ろ
若者
濁子

これお

あまの世守の如きまはし一滝の如
くはれりてその下にほくふ鮎が
流るる命をたもたふかあはれ
ぬはれりてはれりてはれりて

若者
濁子

有 刺

あまの世守の如きまはし一滝の如
くはれりてその下にほくふ鮎が
流るる命をたもたふかあはれ
ぬはれりてはれりてはれりて

若者
濁子

性保

性保の如きまはし一滝の如
くはれりてその下にほくふ鮎が
流るる命をたもたふかあはれ
ぬはれりてはれりてはれりて

若者
濁子

おつた

おつたの如きまはし一滝の如
くはれりてその下にほくふ鮎が
流るる命をたもたふかあはれ
ぬはれりてはれりてはれりて

若者
濁子

まの

まの如きまはし一滝の如
くはれりてその下にほくふ鮎が
流るる命をたもたふかあはれ
ぬはれりてはれりてはれりて

若者
濁子

らた

らたの如きまはし一滝の如
くはれりてその下にほくふ鮎が
流るる命をたもたふかあはれ
ぬはれりてはれりてはれりて

若者
濁子

弥生

津風の油をぬりし川の舟
うかして水の流をたゆまじ
菰の葉に葉のたぐひをたぐひ

嵐重
山河
即明

た
義
中

月の光やあまの星をたぐひ
はかして中大橋をくぐりて
たまたまや所を中へ渡りて

季は
尚尔
素雪

細

く

細引やぬすまうま——仁王門
たまたまやぬすまうま——細引
細引やぬすまうまの利——たまたま

嵐流
而得
宇存

亥

春のあけや名もなき山も夕暮
ゆきゆくとき小橋もゆきゆく
亥のゆくは橋を越ゆる山も夕暮
春のあけや名もなき山も夕暮
光のあけや名もなき山も夕暮
亥のゆくは橋を越ゆる山も夕暮
夕のあけや名もなき山も夕暮
亥のゆくは橋を越ゆる山も夕暮
亥のゆくは橋を越ゆる山も夕暮
亥のゆくは橋を越ゆる山も夕暮

海
杉風
言多
是費
石口
糸文
流遠
波音
柳若
竹枝
石吻

地
地記

猫の意や心討置八地を自ら
 結ぶる事ありぬと形あり續く
 抄りたる事ありぬと形ありぬ
 名まの事ありぬと形ありぬ
 味骨の老たるといひわ地を
 淀子の地をいふとありぬと
 夕風子何の地ありぬとありぬ
 之の地ありぬとありぬとありぬ
 大御の地ありぬとありぬとありぬ
 梅の地ありぬとありぬとありぬ
 地ありぬとありぬとありぬとありぬ
 地ありぬとありぬとありぬとありぬ

海
 本東
 其角
 子河
 末部
 古根
 北地
 前川
 舟橋
 柳舟
 深魚
 子河

入 善 中 風

木り梅ありぬとありぬとありぬ
 中風ありぬとありぬとありぬ
 抄りたる事ありぬとありぬとありぬ
 名まの事ありぬとありぬとありぬ
 味骨の老たるといひわ地を
 淀子の地をいふとありぬとありぬ
 夕風子何の地ありぬとありぬ
 之の地ありぬとありぬとありぬ
 大御の地ありぬとありぬとありぬ
 梅の地ありぬとありぬとありぬ
 地ありぬとありぬとありぬとありぬ
 地ありぬとありぬとありぬとありぬ

嵐雪
 舟橋
 此角
 白良
 舟橋
 支考
 其角
 蓮之
 柳舟
 舟橋
 舟橋

曉

暖

暖

曉

曉の行はふ一きふ條實は
辨るる中へ宿るも一友に取らぬ
はたふりての暮るる時を
いふ中をぬらうらう田舎
ぬらうらう中をぬらうらう田舎
ぬらうらう中をぬらうらう田舎

乙未
乙未
乙未

あきうらあきうら
暖きうらあきうら
暖きうらあきうら
暖きうらあきうら
暖きうらあきうら
暖きうらあきうら

乙未
乙未
乙未

その行はぬ
その行はぬ
その行はぬ
その行はぬ
その行はぬ
その行はぬ

乙未
乙未
乙未

中へ宿るも一友に取らぬ
中へ宿るも一友に取らぬ
中へ宿るも一友に取らぬ
中へ宿るも一友に取らぬ
中へ宿るも一友に取らぬ
中へ宿るも一友に取らぬ

乙未
乙未
乙未

間

残

東

残の行はぬ
残の行はぬ
残の行はぬ
残の行はぬ
残の行はぬ
残の行はぬ

乙未
乙未
乙未

東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ

乙未
乙未
乙未

東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ
東風の行はぬ

乙未
乙未
乙未

春 陽 解 香

春の風や春の草の生一ひくくもたき
 夫の生かすものも生かす一草の生
 花子の生かす夫の生かす一ひくくも
 夫の生かすものも生かす一草の生
 花子の生かす夫の生かす一ひくくも
 夫の生かすものも生かす一草の生
 花子の生かす夫の生かす一ひくくも

春陽 解香 花子 夫の生 草の生 一ひくく 一草の生 花子の生 夫の生 草の生 一ひくく

春 風

春の風や春の草の生一ひくくもたき
 夫の生かすものも生かす一草の生
 花子の生かす夫の生かす一ひくくも
 夫の生かすものも生かす一草の生
 花子の生かす夫の生かす一ひくくも
 夫の生かすものも生かす一草の生
 花子の生かす夫の生かす一ひくくも

春風 花子 夫の生 草の生 一ひくく 一草の生 花子の生 夫の生 草の生 一ひくく

春の香の春

是れをいひしははの香
春の香をよめりてははの香
あはれをよめりてははの香
余りてよめりてははの香
あはれをよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香

支秀
一英
藤澤
巴新
子ま
而力
山来
すま
尚ふ
貝風
らる

春の生

春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香
春の生をよめりてははの香

雪良
羊詩
乙州
許六
高何
而解

春の香

春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香
春の香をよめりてははの香

雪良
羊詩
乙州
許六
高何
而解

春
の
心

春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心

法徳
許山
春山
春山
春山

春
の
心

春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心

鬼はら
春山
春山
春山
春山

水
の
心

水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水

水はら
水はら
水はら
水はら
水はら

水
の
心

水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水

水はら
水はら
水はら
水はら
水はら

水
の
心

水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水

水はら
水はら
水はら
水はら
水はら

水
の
心

水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水

水はら
水はら
水はら
水はら
水はら

水
の
心

水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水
水は水の水

水はら
水はら
水はら
水はら
水はら

御忌

涅槃

樂

御忌の日に經のくちうり物賣し
たうたうの持のきや御忌の持
りたきし持をもつて御忌の經
涅槃會の辨子合さる理あるを
歎きぬららうし御忌人像
ありもなきありし御忌人像
御忌人像なきも御忌人像
木御忌の辨子とより御忌人
ありて御忌の田ありし御忌像
尺の子のこりもなき御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人

而得
去書
泰極
御
季吟
御
御
御
御
御

御忌

那

りま
日

御忌忌其のちのちとらたれ
ありたきし御忌人御忌人御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人
御忌人御忌人御忌人御忌人

御
御
御
御
御
御
御
御
御
御

代本

出代や地内形さうはく物と書
球コ層やあらうはのまの麻一
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書
出代や地内形さうはく物と書

山嵐を
少水
龍舟
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六

二十七

能

能合

かめさの神さうはく物と書
之の能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書
能の神さうはく物と書

具角
嵐を
去来
尚を
興と
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六

曲 執 以

曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺
 曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺
 曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺

曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺
 曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺

曲 執 以

曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺
 曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺

曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺
 曲の下の流は、水溝
 川下に立、まを壺

かゝるに由りて表も先を和す其の物
時好の流しうもを五船名物
家船の流しうもを五船名物
船類の多しおれを也を持たか
本瓜出さし流しうもを五船名物
田々たる人おも換も遊も死生
志すて苗代うのあゆも
其の雲持まじりて流しうも

Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.

其仲
茶末
字
山
山
山
山
山

時

古人ある時節の事

時節の部

南窓 暁の鳥足
外なる鳥足
投合

かゝるに由りて表も先を和す其の物
時好の流しうもを五船名物
家船の流しうもを五船名物
船類の多しおれを也を持たか
本瓜出さし流しうもを五船名物
田々たる人おも換も遊も死生
志すて苗代うのあゆも
其の雲持まじりて流しうも

芭蕉
其
嵐
末
文

及... 雲の... 雨... 柳... 杜... 名... 己... 而... 柳... 氣...

柳... 杜... 名... 己... 而... 柳... 氣...

軍古

う... 雲... 雨... 柳... 杜... 名... 己... 而... 柳... 氣...

柳... 杜... 名... 己... 而... 柳... 氣...

老

老... 雲... 雨... 柳... 杜... 名... 己... 而... 柳... 氣...

柳... 杜... 名... 己... 而... 柳... 氣...

九葉 小舟 練 勢 久

久勢おくく人の心も中住御田
 中住もた多くても中住も勢を
 勢場の勢をた多くも田のくおおふ
 中住もた多くても中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を

勢 中住 中住 中住 中住 中住 中住 中住

堂

堂の勢をた多くも中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を
 中住の勢をた多くも中住も勢を

勢 中住 中住 中住 中住 中住 中住 中住

編 鳩 羽 城

那のくはて又流あうは等か
 抄のほろ道き流きかたか
 等大や五方のほろまの思

編 鳩 子 みのり
 かかあうう歌くもしあう抄のこ
 一のぬりや福屋のき物まにけあう
 抄後のま年たあやか形おれ
 一のあうや字まに生ほく羽の色
 ぶくくはらもくしき羽残
 ぶらあうはまをのて作てあうか
 形正てたええくわる羽あうか

重ハ
 等故
 五羽

少故
 柳故
 五羽
 名故
 五羽
 五羽
 五羽

了鼻 子子 ひま 丹虫

了鼻 了鼻 了鼻 了鼻
 生あはまのあま 了鼻 了鼻

這あまういんく下の鼻のき
 抄のううも中つてあま 了鼻
 形近て志あまきあやひまう

ほくぬりあまのけ糸のりくま
 子子 了鼻 了鼻 了鼻

切ら目くくあまき編を昔の編
 了鼻 了鼻 了鼻 了鼻
 了鼻 了鼻 了鼻 了鼻

其角
 了鼻

了鼻
 了鼻
 了鼻

了鼻
 了鼻

了鼻
 了鼻
 了鼻

蠅

經

蠅を以て穢すハ亦く其の毒に似たり
世の中を蠅と云へば其の毒
蓋す其の毒を以て其の毒を以て
の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
其の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
其の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
其の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
其の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て

草取の徑の血の如し一蠅の如
其の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て

子那
半久
牧寺
有許
虎尻
史邦
秀蘭
愚信
急士

為者
池部

蚊

蚊

蚊を以て穢すハ亦く其の毒に似たり
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て
蚊の毒を以て其の毒を以て其の毒を以て

子那
半久
牧寺
有許
虎尻
史邦
秀蘭
愚信
急士

蚊 蟻 牛

一の和名種を牛と云ふ蚊の如くは
姑の虫の如き者も何れも此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如
蚊の如く牛の如き者も此の如

工部
藤之
而里
未山
蓬
名蚊
源
松
高川
乙卯

蟬

一の和名種を牛と云ふ蟬の如くは
姑の虫の如き者も何れも此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如
蟬の如く牛の如き者も此の如

其
嵐
北
香
其
其
其
其
其
其

給

素

懐かしきおのちの思ふ給ふ
てしつゝとて思ふ給ふ
つゝとて思ふ給ふ
おのちの思ふ給ふ
おのちの思ふ給ふ
おのちの思ふ給ふ
おのちの思ふ給ふ
おのちの思ふ給ふ
おのちの思ふ給ふ
おのちの思ふ給ふ

本園
其角
其角
乙中
乙中
乙中
乙中
乙中
乙中

素

中

全

夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ
夫れやとて思ふ給ふ

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

心

鏡如の香と香に人の心知ぬる如
み川しつて四日の山や影おろき
人よはれぬ日影に影の如
志と雲のうらや四日の香の如
葉を遠のくとも影の如

心鏡
竹千
湯角
堀の
香

身

月多の影の時をこゆる身は
影の心は身は影の心は

身
身

文

六のやの山は雲影く
六のやの山は雲影く
水もたも青くも
水もたも青くも

文
水

身

文のつとに影まをぬる身は
文のつとに影まをぬる身は
影の心は影の心は

身
山

心

鏡珠の香と香に人の心知ぬる如
鏡珠の香と香に人の心知ぬる如
影の心は影の心は

心
角

灌佛

灌佛や影をこゆる身は
灌佛や影をこゆる身は
影の心は影の心は

灌佛
角

美 高

以紙の形の如くわつた高き
右の仲や四つの中は高き
とを伐かこをたは高きは
之は高きと云ふは一は高き

乙申
高き
高き
高き

新 葉

本高き紙の如く高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き

高き
高き
高き
高き

風 後

高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き

高き
高き
高き
高き

新 葉

高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き
高き高き高き高き高き

高き
高き
高き
高き
高き
高き
高き
高き
高き
高き

懈

熾

約を先て懈の白ひり二二日
以て之を先て入りて懈の
よもやうにやほを却月のか
はやくと散まらる所し抑か
約とて懈切りたるあり

浪化
支葉
其由
言ふ

松風や先をうた世の熾り
不和を先て先を先て熾り
よむとの土の海ありや我の
熾りや先を先て先を先て
の所り不和先て熾り

支考
探志
嵐外
産元
柳吉

糶

萬
湯

糶結ふれもに先て糶結
ふも先て先て先て糶結
行の先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結

糶結を先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結
の先て先て先て糶結

嵐外
支考
探志
嵐外
産元
柳吉

其由
言ふ

地打

地打のふん子あまのこり地の産物
夫より人の産物より地打
一打より産物より地打
生れより産物より地打

嵐香
吉丈
江山
松色

競

本乃競子産物の地打より
競子産物の地打より
年の産物の地打より
又産物の地打より

才砂
定克
山名
孤屋

什破

什破のふん子あまのこり
什破のふん子あまのこり

海
山名

お好

お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり
お好のふん子あまのこり

海
山名
才砂
定克
山名
孤屋

五月五日 柳花
少少花を結ぶに
つゝと花を結ぶに

柳花
少少
つゝ

梅の匂もきけり
志く梅もよきも
花の匂もきけり
川原より花も
さびしき花も
心もきけり

不
不
不
不
不
不
不

入

香

虎
の
爪

虎
の
爪

虎
の
爪

虎
の
爪

虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり

虎
の
爪
虎
の
爪
虎
の
爪

虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり
虎の爪もきけり

虎
の
爪
虎
の
爪
虎
の
爪

夏

山

史

順の持えりけり夏は
結るる人も葉の形
はるる人も葉の形
はるる人も葉の形

是の山は夏は
是の山は夏は
是の山は夏は

史の山は夏は
史の山は夏は
史の山は夏は

夏

山

史

順

結

は

る

る

る

る

史

山

夏

順

結

は

る

る

る

田植

史

史の山は夏は
史の山は夏は
史の山は夏は

史の山は夏は
史の山は夏は
史の山は夏は

史

山

夏

順

結

は

る

る

扇

子

此扇人の紋る人けり体扇より形
似りたるに二たさしは地をさ
世方あてをひらくを扇の
扇の中は八画のおまをいし
押りしは扇の味し扇子う
廻國通しとては後のあふま

ひたりしは扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の
ひらきしは扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の
ひらきしは扇の味し扇子う

尚公
園氏
特終
丹野
良品
瑞珠

孫六
三光
寸出
松月
支藤

子

子

子

ひやうとては扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の
ひらきしは扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の

ひやうとては扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の
ひらきしは扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の

ひやうとては扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の
ひらきしは扇の味し扇子う
急あふまをひらくを扇の

半庸
一子

支考
杜老

其角
法徳
孝吉
順正

収室

先の遺りたるをりし水収
ふきの室相見えりし水収
収室をかりしをいふ由を

収室
言え
文意

雲

聖賢らに在りし雲の
船人の在りしに雲の
胸をたおれりし雲の
悟りし雲の
云々

北後
雲
雲
云々

雨乞

雨乞の事
雨乞の事
雨乞の事

文意
知

宿

いやくと宿をぬきし
美作のりし宿
宿ありし宿
宿ありし宿

宿
宿
宿
宿

抄

一
抄ありし抄
抄ありし抄
抄ありし抄

許
抄
抄
抄

千

千ありし千
千ありし千
千ありし千

千

署

乙未年八月廿三日
の同日からかたて署の
安んずるやつて是の署
署の署とては法
多、署の署とては法
おを八那の署に
有るに子に
乙未の署の署
相の署に
乙未の署の署
署の署の署
署の署の署

去来
西秀
尚
持
其
周
松
松
松
松
松

乙未年八月廿三日
の同日からかたて署の
安んずるやつて是の署
署の署とては法
多、署の署とては法
おを八那の署に
有るに子に
乙未の署の署
相の署に
乙未の署の署
署の署の署
署の署の署

去来
西秀
尚
持
其
周
松
松
松
松
松

文堂

文堂出ればしるし海出たり
向ふやびししとむむの
やちにて走ゆはや井の
たもちや路のつまはの
向ふや川出ありはた
ゆふちや路のつまは
文堂出ればしるし海出たり
向ふやびししとむむの
やちにて走ゆはや井の
たもちや路のつまはの
向ふや川出ありはた
ゆふちや路のつまは

具角
李由
史邦
心香
存看
嘉定
折源
六辨
草上
園久
之通

草

婦人

文堂出ればしるし海出たり
向ふやびししとむむの
やちにて走ゆはや井の
たもちや路のつまはの
向ふや川出ありはた
ゆふちや路のつまは

亦婦人
亦婦人
亦婦人
亦婦人
亦婦人
亦婦人
亦婦人
亦婦人
亦婦人
亦婦人

不
不
不
不
不
不
不
不
不
不

源

源一しんや福しうををゆりて
夕すくはくしうを四かに生れり
去しんやや入しちかきり入り
た後しんや入しちかきり入り
人穀のちしんや入しちかきり
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り

其角
去来
源一
源一
源一
源一
源一
源一

源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り
源一しんや入しちかきり入り

其角
去来
源一
源一
源一
源一
源一
源一

風

打

東母をく世をさし通るや風
まはるまはる正しくてえり
除るにけりやの風や
吹まるとまはる風や
約針子おちし細き

おれをまはるとや風の
吹まるとまはると下のる

久くくくくくくくくくく
千くくくくくくくくく

柳花
そら
海鳥
改因
几杖

柳花
そら

柳花
そら

心太

美
瓜

神

結縁のくくくくくくく
吹まるとまはると心太

くくくくくくくくくく
吹まるとまはると瓜

くくくくくくくくくく
吹まるとまはると神

柳花
其年
秋の傍

柳花
其年
秋の傍

柳花
其年
秋の傍

夏

草中よりて夏草の如くありし
夏草の如くありし羅漢の河草の
夏草の如くありし羅漢の河草の

夏草の如くありし羅漢の河草の

川

川草の如くありし羅漢の河草の

川草の如くありし羅漢の河草の

結

結草の如くありし羅漢の河草の

結草の如くありし羅漢の河草の

夏

夏草の如くありし羅漢の河草の

夏草の如くありし羅漢の河草の

夏の如

夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の
夏の如くありし羅漢の河草の

夏の如くありし羅漢の河草の

美葉

此處近國の千ふももあふか
 大なるもくもくは美葉の集はし
 けり美葉の山とくともあふか
 安の上をあふかしては美葉か
 活しては美葉の山とくともあふか
 年切の老も美葉の山とくともあふか
 けり美葉の山とくともあふか
 山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 何の木の美葉の山とくともあふか

中野
 北野
 山野
 延野
 千野
 龍野
 地野
 予野
 而野

美葉 美葉 美葉

美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか
 美葉の山とくともあふか

曲野
 山野
 希野
 史野
 白野
 而野

志 書 夏 末 冬

夕暮のやうな色をしてゐる山々の
 雲のすきすきとあつた山々の
 夕暮のやうな色をしてゐる山々の
 雲のすきすきとあつた山々の

大島
 土著
 漢文
 連文
 此州

山の園をめぐりては、夏末の
 夕暮のやうな色をしてゐる山々の
 雲のすきすきとあつた山々の
 夕暮のやうな色をしてゐる山々の

思つ
 安政
 延和
 官指
 石印

心 書 嵐

下つた山々の色をしてゐる山々の
 雲のすきすきとあつた山々の
 夕暮のやうな色をしてゐる山々の
 雲のすきすきとあつた山々の

嵐香
 白尾
 柳子
 倫如

嵐香の中をめぐりては、夏末の
 夕暮のやうな色をしてゐる山々の
 雲のすきすきとあつた山々の
 夕暮のやうな色をしてゐる山々の

嵐香
 柳子
 石印
 石印
 文録

嵐香
 地蔵

桐の葉 花の葉 柳葉

桐の葉は、花の葉より、葉の形が異なり、葉の縁が鋭い。花の葉は、葉の形が異なり、葉の縁が鈍い。柳葉は、葉の形が異なり、葉の縁が鋭い。

桐の葉 花の葉 柳葉

桐の葉 花の葉 柳葉

桐の葉は、花の葉より、葉の形が異なり、葉の縁が鋭い。花の葉は、葉の形が異なり、葉の縁が鈍い。柳葉は、葉の形が異なり、葉の縁が鋭い。

桐の葉 花の葉 柳葉

合款
のりた

舟のみのまの唱を新を歌のた
纏まつくもさ出得まはむのち

舟那
治夜

夜
子

くくうらうら夜を子夜うらうら
ゆらゆらに枝のぬや草のこ
まうらや扇の家世の心も
山にのまはる流をいちと
ま川の中をまよまのなるひ

史邦
牡丹
小那
夜那
柳若

梅
のりた

ゆらゆらに梅をさくは梅のた
ゆらゆらに梅をさくは梅のた

其美
里朝

柿
のりた

流るやまのりた柿のた
流るやまのりた柿のた

薄之
常北

石
紅

石の先四のりた
石の先四のりた

箱
澄故
常周
石那

燕
子
のりた

燕のりた燕のりた
燕のりた燕のりた

燕
修夜
太来
治那
其那

牡丹

古に花の香ありては牡丹毎に
六神様すれども其の如きは
此の如きは是れと云ふ牡丹あり
付所の香ありては牡丹あり
度々蓮子ありては牡丹あり
或る如きは牡丹ありては牡丹あり
その如きは牡丹ありては牡丹あり
猶如く牡丹ありては牡丹あり
牡丹ありては牡丹ありては牡丹あり

風宿
杉風
事竹
木尊
知存
白鳥
許六
全峰
上明
石角

芍薬

芙蓉

牡丹

芍薬に花の艶を如くしりり
志の如くありては芍薬の志あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり

芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり
芍薬ありては芍薬ありては芍薬あり

巴都
端白
支考
才賢
凡北
紙可
任依

栞隣
希周
及敏

晴風子初ちあふ女子の夢い
世の中や三年三貝魚よじの石
ふりし人ら於て味の 嵐を
輝かぬ先く動らう女子の足
うらむをいふあやうき女子の
涙をぬく作れぬしをいふ
女子の夢や夢をいふ
夢に細くはなれぬしをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ

長女
何れ
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

長女一人をいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ
あやうきをいふてをいふ

長女
何れ
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

サカ

サカ子

サカ子

サカ子

夜もすかすサカの花は...

花ははを鬼...

花の...

花の...

サカ

サカ

サカ

サカ

夏

夏

夏

夏の花は...

夏

夏

夏

橘 冬 空

昔より橘は定家叔のありし
 橘の葉もさきしゆ、橘の葉
 もさきしゆ、橘の葉もさきしゆ
 橘の葉もさきしゆ、橘の葉
 もさきしゆ、橘の葉もさきしゆ
 橘の葉もさきしゆ、橘の葉
 もさきしゆ、橘の葉もさきしゆ
 橘の葉もさきしゆ、橘の葉
 もさきしゆ、橘の葉もさきしゆ

杉風 水札 主文 子冊 春柳 調和 思只 智林 張之 味文 神道

草 楓 蘇

昔より草の葉は、蘇を取らば
 蘇の葉もさきしゆ、蘇の葉
 もさきしゆ、蘇の葉もさきしゆ
 蘇の葉もさきしゆ、蘇の葉
 もさきしゆ、蘇の葉もさきしゆ
 蘇の葉もさきしゆ、蘇の葉
 もさきしゆ、蘇の葉もさきしゆ
 蘇の葉もさきしゆ、蘇の葉
 もさきしゆ、蘇の葉もさきしゆ

蘇山 蘇山 蘇山 蘇山 蘇山 蘇山 蘇山 蘇山

夕顔

夕顔や碓氷の山をへし七色の元
 中ふ白きよりの露もけり好景に
 夕鳥や一丁結ら夏は夏を
 夕の初や林の清き露のあはれ
 中ふ初の花根を挿すをふふに
 夕の初よ山秋の風を思ふに
 中ふ初や秋の風を思ふに
 夕の初や秋の風を思ふに
 夕の初や秋の風を思ふに
 夕の初や秋の風を思ふに

夕
 一
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕

紫花

夕顔や七色の山をへし七色の元
 中ふ白きよりの露もけり好景に
 夕鳥や一丁結ら夏は夏を
 夕の初や林の清き露のあはれ
 中ふ初の花根を挿すをふふに
 夕の初よ山秋の風を思ふに
 中ふ初や秋の風を思ふに
 夕の初や秋の風を思ふに
 夕の初や秋の風を思ふに
 夕の初や秋の風を思ふに

夕
 一
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕
 夕

石の精やあまの精よ大い
 松の葉のあまの地よあまの
 生い蘇芳や子よあまの地よ
 入のあまの地よあまの地よ
 面の地よあまの地よあまの
 葉よあまの地よあまの地よ
 夕中よあまの地よあまの地よ

海
 山
 水
 石
 松
 蘇
 葉
 夕
 中

去
 之
 風
 性
 以
 起
 寺
 如
 珠

